

から」にて紹介したい。因みに現在、韓国でホスピス病棟を持っている病院は奇しくもこのソウル赤十字病院と国立医療院の2病院だけである。

■ ソウル赤十字病院 (Seoul Red Cross Hospital) の附属葬儀場



写真1:ソウル赤十字病院:大韓赤十字社は病院5つとリハビリテーション病院を1つ運営している。ソウル赤十字病院は1905年の開設で、百年以上の歴史を誇る。ソウルの地下鉄西大門駅前にある。



図1: ソウル赤十字病院と葬儀場の位置



写真2:葬儀場への向かう道:葬儀場は一段高い場所にある。病院本館横の救急患者搬送口を通り過ぎるとすぐに葬儀場へ向かう階段が見えてくる。



写真3:葬儀場へ行く階段入口:ハングル文字で書かれた上の看板は葬儀場の案内板。白い菊が描かれている。



写真4:階段を登ると3階建ての葬儀場ビルディングが見えてくる。



写真5:葬儀場の入り口。左側奥の灰色の建物は病院の建物。2つの建物は渡り廊下で直結している。



写真6:玄関ドア。赤十字のマークと、(なぜか)警察のシール(鷲のデザイン)が張られている。ドアに入って左側が事務所。ドアの向こうに電光掲示板が見られる。葬儀時間と、亡くなった方の名前、ホールの番号が掲示で案内されている。この時は2名の方の葬儀が案内されていた。韓国では葬儀の日時と会場を病院のホームページから確認することも出来るようだ。



写真7:葬儀場の玄関から見た葬儀場の庭。喫煙所と「喫煙所」の看板がある。レンガの塀の内側が病院敷地である(なお、病院ゾーンには庭はなかった)。



写真8:病院正面玄関の横を、葬儀の花輪が運ばれていく。日本の病院では決して見られない風景。



写真9:葬儀参列者の方々を送迎するバス。後方に霊柩車。訪問時は病院駐車場が工事中で、狭苦しくなっていた。駐車場の看板は「葬儀場 =>」と書いてあるのだと思われる。人が別の葬儀の花輪を運んでいる(写真8での花輪)。

■ 国立療養院 (National Medical Center) の葬儀場



写真10:国立療養院。1958年、スカンジナビア3か国(デンマーク、ノルウェイ、スウェーデン)の援助によって開設。ソウルの地下鉄東大門駅近くにある。



写真11:病院(国立医療院)と葬儀場の位置関係。写真の緑色枠内が病院の敷地で、白い建物群および中央右側の茶色の建物が病院。手書きの赤色の建物が葬儀場。葬儀場の建物が一番新しく、定礎には「2002.2.5」と彫られていた。韓国の病院が葬儀場の運営を始めたのはそんなに昔の話ではなさそうだ。葬儀場の延べ床面積は3,837㎡(1,163坪)。

国立療養院の病院建物に沿って病院の周囲を回りながら裏門のところに来ると、丁度ご出棺の場面と遭遇した。葬儀場の玄関に黒い霊柩車が停まっており、親族や会葬者が車に向かって列を形成している。亡くなられた方は年配の男性で、その遺影の写真を胸に掲げておられるのは配偶者であろう。配偶者の服装は黒色の韓国伝統喪服であったが、他の参列者は男女とも黒色のスーツ姿であった。遺影の写真は、大学の卒業式のように四角い帽子とアカデミックマントを羽織った姿で、私には意外であった。卒業式でなくても、韓国では正式な写真は礼装で撮る風習なのかも知れない(最後の写真12も参照)。霊柩車の出発時間となった。ご冥福をお祈りした。参列者もバスに乗車し、後を追っていった。韓国では火葬が多いが、土葬の希望も多いという。

病院の葬儀場は鉄筋コンクリート造りのビルディングで、日本の町にある葬祭場に似ている(木造住宅スタイルの米国のfuneral homeとは雰囲気が違う)。建物の中に入ると、最初に本日の葬儀案内の電光掲示板が目につく。私は電光掲示板による案内を、すごく機械的な扱いのように感じた。建物の中に葬儀会場は6か所ぐらいあるようだ。この時の電光掲示板は3か所を案内していた。一番早い葬儀開始時間は朝の5時であった。不思議な時間である。

1階には会葬用品販売の部屋がある。その部屋の片側には6種類の棺桶がひな壇上に展示され、値段表がついている。真ん中クラスの価格は5

万円程で、「価格は日本よりも安い」と思った。故人に着させる金白色の正絹帷子(かたびら)やフェルト製の靴も売られている。喪服が必要な会葬者はここで貸衣装を借りることが出来る。ハンカチやネクタイなどの小物は購入になるようだ。訃報を聞いて田舎から急いで葬儀会場に駆けつけてきた人も、全てを葬儀場で整えることも出来る。便利だ。葬儀場内のホールや廊下はそんなに広くはない。そこに花輪や花束がたくさん並べられているので、より狭く感じる。いくつかの葬儀が各会場でも同時進行しているため、建物内は人で混雑している。それゆえ葬儀場の建物内は静寂で厳かな空間ではなく、がやがやと騒々しい空間であった。

私は韓国のお葬式というと、3日3晩を掛けて親類や近所の甲問客に食事や酒を振る舞い、みんなで賑やかに故人を偲ぶスタイルというイメージを持っていた。おそらく伝統的にはそのような葬儀スタイルなのであろう。しかし現在の韓国では、亡くなった病院に隣接する葬儀場にご遺体を移し、そこで葬儀

を行い、病院敷地から出棺する。このような合理的な行動も、時代の変化から特段不思議なことではなくなったのだろう。都市化と核家族化が社会背景にあるのかもしれない。なお病院の葬儀場でも韓国の葬儀(甲問)は3日ほどかけて行われるようだ。次回以降は韓国の病院経営を紹介していきたい。



写真12:国立病院の葬儀場。建物は5階建て。左奥は病院の裏門。霊柩車が出発した後の風景でバスには会葬者が乗車している。真ん中の車は葬儀社の運搬車で荷台に花輪が積まれている。これが病院敷地内の風景というところが日本人には不思議なところである。



写真13:病院の風景。右手前の建物は9階建てで、病院の医局、研究所、寮(7.8階)などが入っている。真ん中右奥の5階建て建物が葬儀場。中央の道路の突き当りが病院裏門。左側の7階建て建物は病院本館。病院本館と葬儀場とは2階部分が空中廊下で繋がっている。



写真12:<付録>韓国の小学校の卒業式。おそらく名門小学校なのだろう。生徒は男女ともアカデミックガウンと四角の帽子を被っていた。必ず両親そろっての参列のようであった(明洞大聖堂前のポーチで撮影)。

Topics 国際支援部 - Department of International Support - 設立にむけて



スタッフ紹介

国際支援部長	堀井 城一郎
薬剤師	倉田 真士
	河野 泰宏
看護師	片山 智之
	木原 奈緒美
放射線技師	石井 郁也
事務職	矢野 平
	伊藤 仁江

●国際支援部設立に向けて

●消化器内科 堀井 城一郎

現在、日本には数多くの外国人が渡航、居住しており、福山においても日常診療のなかで外国人患者に触れることが多くなってきています。政府の医療国際展開タスクフォースにおいても、医療技術並びに医療サービスの国際展開にむけ、外国人患者受け入れの促進が掲げられています。しかし、外国人患者が日本の医療機関で治療を受けるには言葉の壁・制度の問題・習慣の違いなど数多くのハードルが存在します。当院においてもこれまで外国人患者の受け入れ体制は十分ではなく、現場のスタッフに一任されている状況でした。

今後すんでいく医療のグローバル化に対応するために、当院においても国際的な医療活動を支援する部門として「国際支援部」を立ち上げる運びとなりました。

当部門の目標として

- ① 外国人患者の受け入れ体制の充実,
 - ② 海外の病院との交流を通じた国際医療貢献,
 - ③ 海外研修・院内研修による医療スタッフのグローバル化,
- を目指して活動していきます。

いずれの目標も院内の多くの部門の皆様の、また外国人患者の受け入れについては院内だけでなく地域の皆様の御協力も必要となります。何卒お力添えのほどよろしくお願い申し上げます。